

やすらぎだより

2
月
号

陽気で緑にあふれた生活 それやすらぎ園です

施設長コラムバックナンバーホームページ掲載しています。

コラム第176号

「忘れ物」

施設長 植田 誠



最近、とみに忘れ物が増えてきた。何事もメモする様に心掛けているつもりではあるが、些細なことから冷や汗ものまで体験してしまう。

自宅を出てからズボンにベルトが無いことに気付いたりハンカチを忘れていたり、駐車した車両の位置がわからず探しまわったりする等は‘ちょいちょい’あるが、近頃は紛失したスマホを引取りに行った際にマフラーを忘れる等、ダブルで起こしてしまう。まあどれも生死にかかわる程ではないが、気にしない訳にはいかない。

忘れ物が増えてきたことがきっかけで認知機能の低下を知る高齢者が多いとのこと。認知機能が老化する一番の原因は加齢だが、60歳を過ぎると少しずつ衰えるらしいのでボチボチ気になる年頃だと自覚すべきか。勿論、なんでもそうだが「個人差」があることは言うまでもない。

その認知機能を測定するスケール（ものさし）として我が国最初に開発されたのが「長谷川式簡易知能評価スケール」。今から46年前、慈恵会医科大学の長谷川和夫先生らが中心となって作成されて以来、幾度の改訂を経て今も臨床や研究の現場で幅広く活用されている。

特に、3年前に改正された道路交通法の施行により、運転免許証更新を希望する一定の75歳以上の方々に義務付けとなった「臨時認知機能検査」は、認知症の恐れや疑いを判断する材料として、その中身に広く活かされている。

「ワシをバカにしとる検査や！おまけにタダと違う」

「すぐに答えさせよらん、別の質問が終わった後で聞くんや。ズッコイわ」憤慨されたり、嘆いたりと不評が多いのも事実だが、必要不可欠なものさしの一つとして活用されているのが現実だ。

日常で忘れ物や忘れ事が多くなり、生活に支障をきたすことから疾病に繋がることは多い。一方、忘れることで対策を考え環境も整えることもでき、何より自己覚知と他者からの助言も受けられる。かの川端康成は申された「忘れることで得られるものがある」と。

とは言え気を付けねばならぬ、ズボンにベルトが通っているかを。



社会福祉法人やすらぎ会 実施事業

- 特別養護老人ホーム やすらぎ園
- 在宅サービス事業所
- 居宅介護支援事業所
- 訪問介護事業
- 訪問入浴介護事業
- 短期入所生活介護事業
- 在宅介護支援センター
- 天理市東部地域包括支援センター
- ケアハウス やすらぎ
- 介護予防関連事業
- グループホーム むつみあい
- 住まいの生活支援事業